

# あいち病害虫情報 最新情報

令和5年4月17日  
愛知県農業総合試験場  
環境基盤研究部病害虫防除室

## ムギ類の病気（赤かび病、うどんこ病）

ムギ類赤かび病は、開花期から乳熟期に降雨が多く、気温が比較的高い（20～27℃）と急激に感染が拡大します。名古屋地方気象台4月13日発表の1か月予報によると、向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並みか多い見込みです。また、近年同病の発生量が多く、本病の一次伝染源（越冬菌量）が多くなっていると予想され、今後の発生拡大が心配されます。春先の気温が高く例年に比べてムギの生育が早いため、本日発表の「令和5年度ムギ類赤かび病情報第2号」を参考に、確実に適期防除を実施しましょう。

ムギ類うどんこ病は、春が温暖で雨が多く、ムギが早くからよく繁茂した年に多く発生します。今年は3月下旬に本病の初発を確認しており、例年に比べ初発が早いです。今後、発生が拡大する恐れがありますので、ほ場の発生状況を注意し、発生を確認したほ場では防除を行いましょ。

## 水稻の育苗期防除

普通期栽培のは種作業が始まります。次の1～6に注意して適正な種子消毒に努めましょ。

- 1 細菌性病害にも効果のあるテクリードCフロアブルなどを用いて、種子消毒を行いましょ。浸漬処理法の場合、薬液温度は極端な低温にならないようにしましょ。また、処理濃度と時間を守りましょ。種子消毒後の廃液は、適切に処理しましょ。浸漬処理後の廃液処理が困難な場合には、種子粉衣（湿粉衣法）や塗沫法などの使用方法に切り替えるか、微生物農薬や温湯種子消毒を利用しましょ。
- 2 エコホープDJなどの微生物農薬を利用する場合、薬液の温度が10℃以下、30℃以上では効果が劣るので、処理温度に注意しましょ。
- 3 温湯種子消毒の場合、適切な処理温度、時間（例：60℃、10分）を守りましょ。
- 4 種子消毒後は病原菌の汚染がないよう管理しましょ。
- 5 催芽温度は30～32℃を守りましょ。
- 6 高温での浸種や長時間催芽は細菌感染を助長するので避けましょ。

## 落葉果樹の病害虫

ナシ黒星病について、4月上旬の巡回調査では花そう基部での発生量は平年並でした。しかし、名古屋地方気象台4月13日発表の1か月予報によると、向こう1か月の降水量は平年並か多い見込みであるため、今後降雨に伴い発生量が増えるおそれがあります。ほ場での発生状況に十分注意してください。また、ナシ赤星病の感染時期を迎えていますので、黒星病とともに防除しましょ。

モモを加害するクワシロカイガラムシの防除適期は、1齢幼虫の発生ピーク時です。本日発表の「モモのカイガラムシ類情報第1号」を参考に、適期に防除しましょ。

## 果樹カメムシ類の飛来はやや少ない

果樹カメムシ（チャバネアオカメムシ）の6月末までの飛来数は、越冬成虫量からおおよそ予測できます。今年のチャバネアオカメムシの越冬成虫量はやや少ない状況です。越冬成虫量に関する詳細は、4月4日発表の「果樹カメムシ類情報第1号」を参照してください。

果樹カメムシは夜温が上昇すると、活動が活発になります。今後の園内への飛来状況に注意しましょう。

## ナシヒメシンクイの発生に注意！

フェロモントラップによるナシヒメシンクイ越冬世代の成虫誘殺ピークの時期が平年と比べてやや早い地域があります。また、誘殺数は平年と比べて多い地域があります。詳細は、本日発表の「ナシヒメシンクイ情報第1号（モモ）」を参照してください。

## 果菜類の病害虫

ナスすすかび病の発生が目立つほ場があります。同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション防除を心がけましょう。

## ウイルス媒介虫を施設外に出さないようにしましょう！

トマト黄化葉巻病やトマト黄化病、キュウリ黄化えそ病の防除対策の基本は、ウイルス媒介虫を「施設内に入れたい」、「施設内で増やさない」、「施設外に出さない」の3つです。収穫期間中はウイルス媒介虫であるタバココナジラミ（トマト黄化葉巻病、トマト黄化病）やオンシツコナジラミ（トマト黄化病）、ミナミキイロアザミウマ（キュウリ黄化えそ病）の防除を徹底しましょう。なお、次作の感染源を減らすため、収穫終了後は残さを持ち出す前に施設を密閉して、ウイルス媒介虫を死滅させましょう。

フェロモントラップなどの各種調査データは、HP「あいち病害虫情報」（アドレス：<https://www.pref.aichi.jp/site/byogaichu/index.html>）を参照してください。

問合せ先 愛知県農業総合試験場 環境基盤研究部 病害虫防除室  
TEL 0561-62-0085 内線471 FAX 0561-63-7820